

黒人はいかに動物化されたか

Boisseron, Bénédicte. 2018. *Afro-Dog: Blackness and the Animal Question*.
New York, NY: Columbia University Press.

愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程
福田薫

2020年、Black Lives Matter (BLM) 運動が米国から世界中に拡大した中で、ホワイトハウス周囲で抗議する BLM 支持者に対し、「獐猛な犬をけしかける」とトランプ大統領がツイッター上で恫喝した、と報じるニュースがあったことを覚えているだろうか。このニュースからも見て取れるように、黒人と動物を巡るネガティブなイメージに基づくレトリックはアメリカ社会に染み付いている。それがどのように社会に刻み込まれていったものなのか、奴隷貿易の時代から今日までの南北アメリカ大陸における黒人と動物の関係を通じて検討したのが本書である。題名の“*Afro-Dog*”とは、著者による新造語で、W.E.B. デュボイスの「二重意識 (double-consciousness: 黒人であることとアメリカ人であることがせめぎあう、分裂した自己意識)」を土台に、動物・動物性と結びつけられた意識—黒人性に内在するもう一つの意識—を合体させた概念を指す。

著者の Bénédicte Boisseron は、ブラック・ディアスポラ研究、フランス語圏研究、アニマル・スタディーズを専門領域とするフランス出身の研究者で、ミシガン大学の教授を務めている。彼女は、フランスからカリブ海のグアドループ島へ定年後に隠居した両親(彼女の父親はフランス系カリブ人である)を訪ねた際、飼い犬のジャーマン・シェパードに対する島の人々の恐れを目にし、カリブ地域の奴隷制と犬に関する歴史の後遺症に気づいたという。この体験が *Afro-Dog* のテーマを構想する契機の一つとなったと思われる。

本書は序と結語の間に本体の 5 章を挟む 7 部構成となっている。まず、序では本書の目的と各章の概要が述べられる。著者はマージョリー・スピーゲルやピーター・シンガーらによる、黒人奴隷制と現代の動物虐待の比較やスピーシーズイズム (speciesism: 「種差別」とも訳される) の概念、また動物の権利団体、People for the Ethical Treatment of Animals (PETA) の「動物は新たな奴隷ではないか」と問うキャンペーンを取り上げ、マイノリティの差別と動物の抑圧の背後には類似の論理があると認めつつ、動物の権利擁護の立場からの両者の比較は、動物の権利という自らの大義のための道具としてマイノリティの人々の苦痛を利用することにほかならず、人間状況の卑小化につながりかねない、と批判する。焦点化すべきは、黒人性と動物性を互いに競わせ、どちらの価値が高いかを測るようなシステムの存在を露わにすることなのである。その上で、本書の目的は、こうしたマイノリティを利用する形で動物のための大義をなそうとする昨今の言説に向け、異種間 (interspecies) の連関を通してオルタナティブを提示すること、具体的には、ブラック・スタディーズとアニマル・スタディーズの接合を図り、黒人と動物の歴史がいかに結びついているかを示すことである、と説明する。

第 1 章は、現在のアニマル・スタディーズは 80 年代のポストコロニアル研究の後続であるとして、序で取り上げた黒人と動物の比較について論考が深められる。18 世紀のジェレミー・ベ

ンサムから始まる動物解放論・動物の権利論の歴史的な流れに加え、人種、ジェンダー、動物性等の抑圧の複数性をほぐす道具としての交差性の概念とそれが孕む矛盾も視野に入れた議論が進展する。

第2章が扱うのは、主に米国と西インド諸島における黒人と犬の歴史的関係である。それは「人間の最良の友」という犬のイメージとは正反対の、黒人に対する犬の残忍な使用の歴史である。著者はダナ・ハラウェイやハーラン・ウィーバーの「犬ー人間」の変容の議論を取り上げ、犬が脅威となるか友となるかは、犬が接触する人間の種やジェンダーの影響を受ける、という。また、文学や美術、歴史、社会の中で表象された犬を通じ、犬と黒人が人種化、動物化されていることを示す。

第3章では、家畜でも野生動物でもなく、境界的動物(公園のリスやハト等)の範疇にも合致しない「クレオール犬」という新たなカテゴリーの動物を媒介に、片利共生(commensalism)による動物と人間の間を見えていく。ミシェル・セール、オクターヴ・マノーニ、マルセル・モースらの寄生や依存、贈与の概念を参照し、コロニアルな問題とも絡ませた議論が展開される。そして、片利共生は反植民地・反ヘゲモニー・反人間中心主義の関係性であり、クレオール文化においては人間と動物、人間と人間の間も片利共生的なものである、との分析がなされる。

第4章は、「所有されること」と「所有すること」という二つの所有の文脈から、動物と人間を考察する。野良犬と黒人、フランスのアラブ人(ネズミのイメージ)とアメリカの黒人(犬のイメージ)、ナチス政権下のユダヤ人とアメリカの黒人(いずれも犬の所有を禁止された)といった類比を介し、動物のように所有されることと、動物(犬)の所有を許されないことがもたらす脱人間化が論じられる。

ここまででは、人間との関係を考察する際に使用されたのは、主に犬のメタファーであったが、第5章では猫を登場させ、動物(猫)のまなざしを論じたジャック・デリダを引用し、ものをいわず、見えない存在である動物・黒人により観察されていたことに気づいた人間・白人の恥ずかしさについて検討する。創世記やフランツ・ファノン等の作品、またエマニュエル・レヴィナスの顔論を手がかりに、著者はその恥の感覚は他者の目を通じた自己認識によるものである、と述べ、観察者(動物・黒人)は他者による自己認識が可能な存在とは思われていないこと、つまり人間・白人のような「話す」存在とは想定されていないこと、その根底には動物・黒人にどのように見られ、考えられているかを知らない人間・白人の側の不安があることを炙り出す。さらにガヤトリ・C・スピヴァクのサバルタン概念も用いて、こうした抑圧に抗って話し始める黒人と、動物の代わりに語ろうとするアニマル・スタディーズの間にあるものを探っていく。

最後の結語はこれまでの論考の結論を提示するというより、他者に代わって話すことに伴う立場性、権威と正当性の問題について疑問を投じるオープン・エンドの形で書かれており、本書からさらなる問いと思考を続けていくためのものとなっている。

評者は動物の権利論者ではないが、動物の保護活動に細々と携わっている者として、動物の解放を黒人奴隷解放になぞらえる議論は、黒人の心情やトラウマを考慮しておらず、また動物の苦しみという点ばかりを強調することにより、結局のところ黒人奴隷を苦しむ存在としてのみ規定することになりかねない(逆もまたしかり)、との本書の分析を重く受け止めたい。動物の権利運動が徐々に活発になりつつある日本でも、動物の苦痛と奴隷の苦しみの比較や、スピーシーズムまたは種差別という言葉が耳目に触れる機会は増えてきていると感じる。しかし、動物の権利論は原則的にあらゆる形の動物利用を問題視し、価値体系としてイデオロギー化

しやすい。また、デリダのいうように、人間は動物が何を考えているか、本当のところは知ることができない。ゆえに、動物に関わる大義や思考は動物を含む他者の本質化・矮小化と無縁ではいられず、別の抑圧・差別を生み出しかねない点に一層意識的であることが必要だろう。

また、興味深かったのは「片利共生」の議論である。片利共生は生態学の用語で、二種類の有機体のうち、一方のみが利益を得て、片方は利益も得ないが害も被らない、という共生関係を意味する。Boisseron はこれを貸し借りや返礼、負債といった行為・意識なしに他者と共有・共生する哲学ととらえ、片利共生的なクレオール文化の動物の姿を描く。そのような人間特有の契約的な関係性から外れたところで共生する在り方は、人間と動物、また人間と人間の関係の結び方の代替案を提示している、との指摘は示唆に富む。見返りや負債の意識を持たない関係性からは、少なくとも理論上、権力や支配というものが発生しにくいのではないかと考えられるからである。

アニマル・スタディーズは、“Human-Animal Studies”とも称され、人間と動物の関係に注目する研究である。本書は、スティグマ化されている(黒)人と犬の結びつきを、人間と動物の関係の一例として、文学や哲学、歴史分野の数多くの著作や理論を駆使し、多様な切り口から論じた好著といえよう。トピックごとの関連がわかりにくい構成となっているのが難点ではあるものの、*Afro-Dog* は、動物(他者)を迂回した人間(自己)理解に資する一冊となるはずである。

Fielder, Brigitte. 2019. Why Animal Studies Must Be Antiracist: A Conversation with Bénédicte Boisseron. *Edge Effects*, October 12, 2019.

<https://edgeeffects.net/afro-dog-benedicte-boisseron/> (accessed January 16, 2021).